

第1回 合同研修会の協議の概要等

協議1: <主体的な学習>とは、

□主体的～自分で考えて、判断し、行動する

≡

自主的～行うことはわかっており、自ら進んで行う。

□主体的な学習とするためには、子どもの学習意欲を高める必要がある。

経験的に

○子ども自身が問いを持つ～子どもがつくる学習課題

:解決の見通しがあることが重要(既習事項の活用)

○学習意欲が持続・継続するためには、次時へのつながりが大切

○単元の終わりに発展的な内容を扱うと学習意欲が高い～子ども達が自由に学習する

<中山の私見>

◇ 学習意欲を高める方策

【外発的動機付けと内発的動機付け】

ア 罰が与えられる。(強育、恫喝、叱られる)

イ 褒美がもらえる。(賞)

ウ 褒められたい。認められたい。(承認欲求)

エ 自らの夢や目標を達成するために粘り強く取り組む(耐性、辛抱、鍛錬)

オ 教科本来の魅力から意欲を高める(不思議、驚き、感動、興味・関心)

*アからオへと外発的動機付けから内発的な動機づけへと変わっていく。どの項目がよいという訳ではない。

アは、即効性があるが転移しない。いつまでも受け身である。

イは、意欲の高まりはあるものの、だんだんと要求が大きくなる。

ウは、自己実現が高まるが、褒めるタイミングや程度によって効果に違いが生ずる。

エは、継続した動機付けなる。(キャリア教育) エの中でも、愛する人のためにという目的・目標は、最大といわれている。(親の愛など)

オは、衝動・衝撃となり、インパクトの強いものであるが、すぐに消えてしまう。

よって、子ども達が主体的な授業を構築するとなると、これらの指導を組み合わせる必要がある。

例えば、1単位時間の指導計画を考える場合、

導入～興味・関心を高める教材との出遭い工夫

展開～高まった興味・関心を継続させる工夫(意欲化)

・解決の見通しがある程度つくこと

・手立てや手順がわかる など

終末～課題解決の結果の理解(成就感)、教師からの承認による満足感、単元の終末では、新たな価値にもとづく態度形成まではぐくまれる。

次時の課題提示などにより新たな興味・関心へ導くこと。

<協働的な学習>とは、

～個別ではない学習 → ペア学習・グループ学習・全体での交流

(バズ学習)

□交流の質が問題である。

→質を高める方策は？

○適切な学習課題の設定

→どのような課題なのか

○既習事項の定着と活用

□伝え合う力、コミュニケーション能力

○言語活動を取り入れた教科指導

<中山の私見>

◇比較検討→吟味→特徴（長）に気づく

◇気づく ～ ・情報収集（五感：視覚・聴覚・臭覚・味覚・触覚）

↓

・既習事項や経験知との比較検討

↓

・概念等の再構築（「あっ、そうか」という思考）

「わかる」「できる」「新しい見方や考え方」・・・楽しい

* 帰納法、演繹法

* 収束的思考、拡散的思考

以上のようなことを考え合わせると、アクティブラーニングは、

発見学習（ブルーナー）、仮説実験授業（板倉聖宣）を想起させる。

発見学習や仮説実験授業の課題（弱み）

①時間と労力がかかる

②学習への動機づけが低い。

③耐性の低い子や低学年の子どもには向かない。

④機械的受容学習をベースにしている内容（知識の暗記・定着）には適していな

など

また、**体験学習**や**追体験学習**も想起される。

体験学習の課題（弱み）～「活動あって学びなし」などと揶揄される。

いずれによせ、話し合いができる（協働できる）集団づくりに力をいれなければならない。